

令和元年6月14日現在

機関番号：34317

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2018

課題番号：17K13539

研究課題名(和文)古琉球期琉球王国における仮名文字資料の表象性に関する研究

研究課題名(英文)The representation of kana character in early Ryukyu

研究代表者

矢野 美沙子(Yano, Misako)

京都精華大学・人文学部・講師

研究者番号：40706636

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、古琉球期において仮名文字が使用されるに至った背景と、仮名文字が古琉球の政治システムの中で表象するものについて、分析を行った。

対内的に国王権威を称揚する要素として、国王顕彰碑をはじめとする石碑がある。石碑には漢文を用いたものもあるが、琉球固有の名詞や単語を使用しているのは仮名碑文の方である。碑文を作成する中国的な文化と、仮名を用いる日本的な文化の両方を取り込んで仮名碑文を作成し、国王の言葉やミセゼル、役人の名前を表記しているという点にこそ、琉球王国の主体性を見ることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古琉球期琉球王国は、国の財政的・政治的基盤を対外関係に大きく依っており、先行研究もそうした視点に集中してきた。国内資料の残存が少ないという欠点を補うため、本研究では石碑に記された碑文に着目し、研究を行った。その結果、仮名文字を使用して再現される国王や祝女の言葉は、古琉球の政治・宗教システム、すなわち国を運営していくための大きな枠組みと密接に関わり、不可分の関係を生じていたことを明らかにした。

また、本研究を通じて古琉球期資料の収集・解読が進められたことにより、歴史学に留まらず、隣接他分野の今後の研究の進展にも寄与する情報を残せたと考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to elucidate the representation of kana character in early Ryukyu.

Stone monuments celebrate the authority of the King(中山王). Stone monument written in kana uses characteristic words of Ryukyu. Ryukyu accept both Chinese culture to create stone monument, and Japanese culture to use kana character. And indicate King's words and Misezeru and names of officials in kana character in stone monuments. This is the initiative of Ryukyu.

研究分野：琉球史

キーワード：琉球史 仮名 石碑

1. 研究開始当初の背景

戦後の琉球史研究は、1970年代に飛躍的に前進した。しかし古琉球史に関しては、国内資料の残存が少ないなどの理由から、他時代に比べて研究史の蓄積が薄い傾向は否めない。琉球王国は海洋国家であり、対外関係・交易に依るところが大きいと、外からの視点から古琉球を見る研究がコンスタントに進展する一方で(内田晶子・高瀬恭子・池谷望子『アジアの海の古琉球』2009年・上里隆史『海の王国・琉球』2012年など)、古琉球国内の実相に迫る研究は後手に回ってきた。

そうした中で、古琉球国内に関する研究の大きなメルクマールとなっているのは、辞令書史料を用いて古琉球の政治・社会構造に迫った高良倉吉氏の『琉球王国の構造』(1987年)である。現在においても、通史類で古琉球について言及する場合、1980~90年代における高良氏の研究成果が多く引用される。換言すれば、辞令書に関する高良氏の研究成果に対して批判的実証が行われてこなかった。

古琉球辞令書は琉球独自の語彙を交えながら、仮名を基調として記される。ほかに、「おもろさうし」や石碑・鐘の銘文など、古琉球時代には仮名を用いて作成された資料が散見する。東アジア世界で漢文の使用が主流であった当該期において、特筆すべき特徴である。古琉球期におけるこうした仮名文字使用の意味について、研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究では、古琉球期における国内資料を網羅的に分析し、資料作成に仮名文字が選択された背景と、仮名文字が古琉球の政治システムの中で表象するものについて、分析を行った。

古琉球期琉球王国は、国の財政的・政治的基盤を対外関係に大きく依っており、先行研究もそうした視点に集中している。辞令書をはじめとする数少ない同時代国内資料は十分に検証されず、国を支えた政治システムそのものに関する研究は十分に進捗していない。琉球は東アジアの中心に位置しており、複数の文化が混ざり合う境界地域であった。漢文の使用が基本である当該期東アジア世界の中で、古琉球期琉球王国が文書の作成に仮名文字を用いたことの意味について、明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、古琉球期における琉球国内資料(辞令書・金石文・おもろ)を網羅的に収集し、古琉球において仮名文字が表象する世界を分析した。

平成29年度には資料収集のため、沖縄県那覇市・浦添市に複数回出張を行い、寺社・城跡における金石文の悉皆的収集を行った。また、辞令書及びオモロに関する周辺資料の調査・収集も並行して行った。

平成30年度には、逐次補足調査を行いつつ、仮名文字資料の有する特色について、分析を行う。中でも仮名文字石碑に着目し、その製作者の背景も含めた考察を行った。

4. 研究成果

古琉球期に作成された碑文の内、琉球固有の名词や単語(「あんじべ・あすたべ・大やくもいた・里主べ・けらへあくかべ」等)を用いているのは仮名文の方であり、漢文では、それに相当する漢語(「公卿・大夫・大臣・百官・庶人」等)を選び直して用いている。辞令書や仮名文字碑文では、勅命やみせぜるなど、発された言葉を、より正確に記すというスタンスが徹底されていた。仮名碑文を表面に、漢碑文を裏面に配置する碑文の作り方も、仮名表記を重視する姿勢を端的に象徴している。

古琉球人にとっての国王(「中山王」)は、政治・宗教上のトップであった。明皇帝からの冊封によって与えられた「中山王」という号は、東アジア世界において琉球の位置づけを示す重要なものであるが、あくまで対外的な要素である。

対外的な要素によって担保される権威は、国内機構が未成熟であった時期には重視された。しかし、中央集権的国家体制が形成されるに伴い、国王の権威も、国内を基準としたものにシフトしていったと考えられる。対内的に国王権威を称揚する要素として、国王顕彰碑やおもろ・みせぜるがあり、こうした対内的な権威を示す資料は、仮名を用いて作成されていた。

碑文を作成するのは中国的な文化であり、同時代の日本ではあまり確認できない。その一方で、碑文を作成するのに用いる仮名は、日本的な要素である。琉球人が日中の要素を取り込んで仮名碑文を作成しているという点にこそ、国家の主体性を看取することができるだろう。古琉球人が仮名文字を使用したのは、日本からの影響という側面には留まりきらない、主体的な選択によってのことであると考えられる。

仮名文字を使用して再現される国王や祝女の言葉は、古琉球の政治・宗教システム、すなわち国を運営していくための大きな枠組みと密接に関わり、不可分の関係を生じていた

と言えるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

矢野美沙子「古琉球期の仮名碑文に関する一考察」(『史観』177号、2017年)

〔学会発表〕(計1件)

矢野美沙子「琉球王国における石碑作成に関する研究」(沖縄文化協会2019年度公開研究発表会)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: なし

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

(2) 研究協力者

研究協力者氏名: なし

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成

果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。